

繡像  
綺譚

石言遺響

~ 13  
3816  
2

8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3



門へ13  
號3816  
卷2

繡像復讐石言遺響卷之二

飯台 曲亭主人著

門人 魁雷癡叟校



第三編

怪鳥を射て一箭家傳を顯す  
邪正を異りて兩妻枕席を譲る

三さん位り良りょう政せい卿けいのの小こ夜やのの中ちゆう山さん楨てい乃の原げん小せうてて田でん乃の月げつ小せう夜や姫ひめ小せう環わん會かいああひひけけままババ姫ひめ春はる本もと兵へいたた米こめつつととももににああ小こ来きぬぬ縁えん故こををつつばばららにに話わててああ良りょう政せい卿けい備び由ゆうをを聞きててそそのの至し孝こう精せい忠ちゆう漢かん嘆たん美びしてして宣のたまひひききららハハもも法はふ文ぶんがが事こと心こころををたたくくハハ忍しのみみああぐぐ冬ふゆ配はい所ところあありりししととりりてて安やす否ひをを訪たずねねららせせるるここかかああははははとと今いまののははららびびとと逢あひひてて逢あひひとと風ふう縁えんのの竭つきぎぎららとと後のちあありりいいままをを枕まくら蓆せき

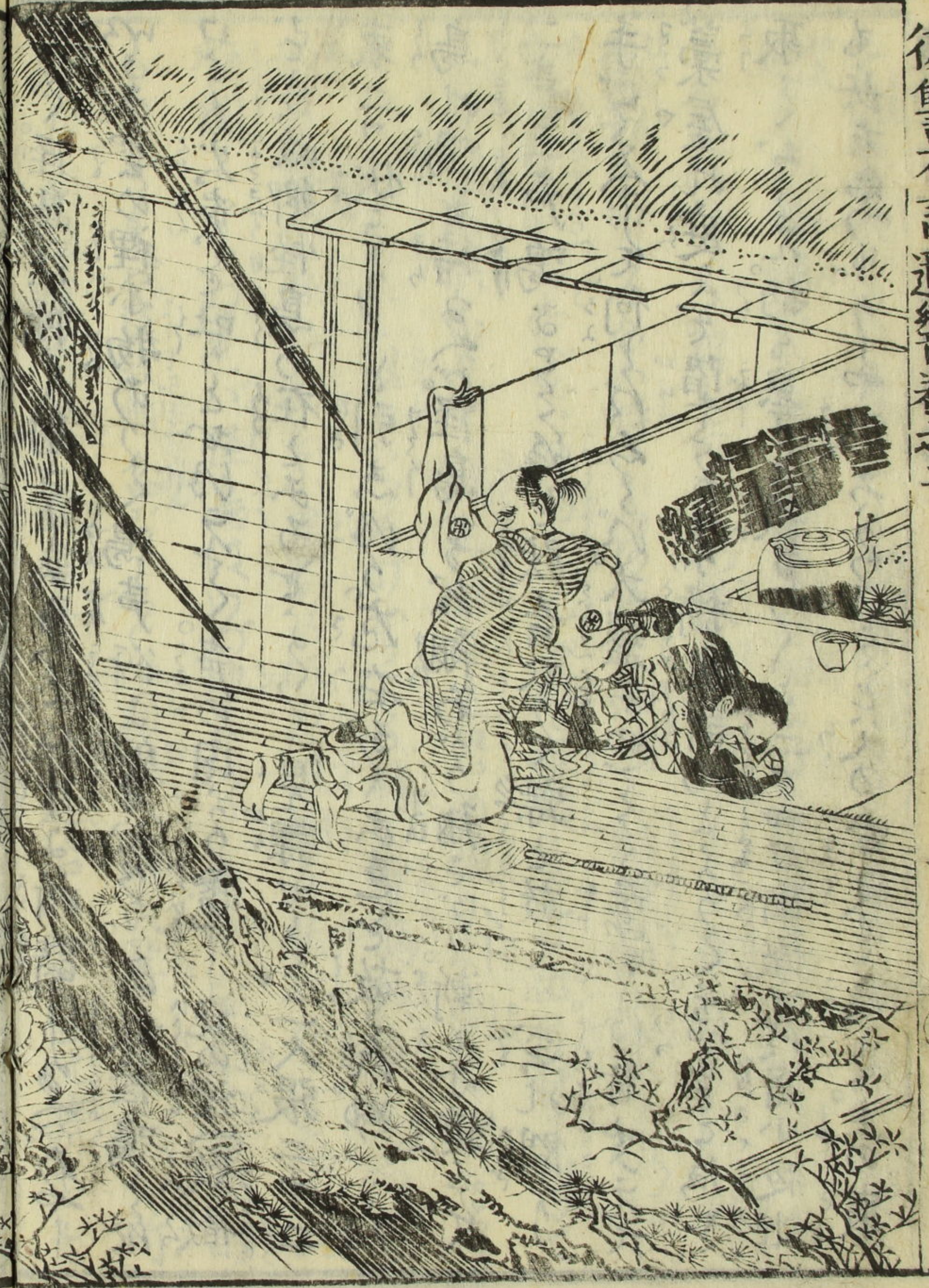
夏雜言石言遺響卷之二



を共小せんといふも、いづる他伐の周よりむくむる日なり。都  
迎りて、婚姻の事整ふべしと懇切に言え、あまき月小夜姫乃  
より、びりさうちと。兵を束つ、欽喜雀躍し。主従四人、は括然と  
往車をかり、あふ時、も何と天油然と結陰前山、頻りに鳴動  
良政卿、信とつて、まは妖鳥ごさんおれと、椽頬まきり、出弓杖、又推乃て  
立ち、一は法供あり、橘主計、ぬ主君の後、小引副、射、おと  
あり、刺ごめん、と、鞆口ろろげむらう。時、又雷鳴、数声して、あう  
雨、銀乃、篠、乱、と、小異、あう、ば、悪風、樹を、抜、砂と、飛、只  
恒闇となり、ゆき、怪鳥は、以、地より、つと、定、射、つ、る、的  
も、あ、う、ま、ま、良政卿、念、ご、う、く、南無八幡大菩薩、と、念、祈  
念、なる、救世大慈觀世音、怨敵退治の智恵、此、箭、前、と、そ

え、く、怪鳥、伏、轉、く、射、さ、め、あ、く、と、心中、又、祈、請、の、あ、や、  
い、か、雲の、裡、小物、あり、と、鳴、声、訝、よ、郷音、に、なる、この、妖怪、鳴、に、  
口、う、う、火、炎、を、吐、う、と、お、ほ、え、く、声の、内、より、電、一、庇の、裡、へ、散、徹  
と、良政卿、怪鳥の、在、と、あ、ろ、と、よく、見、課、せ、く、二人、張、二十、二  
束、二、伏、さ、う、く、と、引、志、げ、り、た、右、あ、く、ま、ま、と、放、た、ぬ、ゆ、い、  
鳥、れ、鳴、と、待、ま、る、が、怪鳥、も、ん、翔、あ、が、り、翔、さ、が、り、漸、く、小、近、な、て、  
二、声、三、声、鳴、ま、り、と、後、と、弦、音、た、く、漂、と、放、て、ば、雲、れ、間、り、  
手、ご、う、く、何、と、ん、あ、く、ば、大、盤、石、の、ご、う、落、の、音、あ、え、て、  
藁、屋、れ、庭、よ、と、墮、う、り、橘、主、計、つ、と、り、く、落、ま、り、後、と、  
取、く、お、え、柄、も、拳、と、徹、し、く、と、三、刀、四、刀、衝、徹、で、月、小、夜、姫  
も、兵、を、束、つ、り、や、形、あ、う、り、と、と、父の、今、般、ま、為、も、主の、最







期どいりあてしう小見どとも岩が根のどこかめめて流るる  
涙とつらうのり。斯く雷雨忽ち霽て日比光鮮明なれば  
良政卿立ちうて彼怪鳥をえあふふ。其の鳥全身ハ蛇のおとく  
めく肉翅あり。頭を雉に似て雉たうは此背ハ鐵のごとくありく  
足の礎は異なればこれとるるものも駭然として舌を巻く。  
今して人口は膾炙する。小夜山中の双乃雉是へる時遠見  
れ士卒相闘の螺貝と吹傳れハ西坂小屯せし二百餘騎籠と  
和兒巴命歌を揚ぐ。たちあふの処に馳來れり。良政卿ををりら  
怪鳥の首と切く歩卒小擔せ月小夜姫よむひく宣言  
る。これ今法身とも伴ひあべつらあへども勅命と奉てま  
怪鳥退治よびひく身此女を推めて上洛せんこと禁庭の恐れ

據るれば且く再會と待たるべし。これ帰洛せよ速く迎の士  
卒を下まへ。今の一言ふりたる後の證ともえあへとも。若  
此中お花とらうし。觀世音乃尊像とらう如く。これと姫小  
輿へ兵たあつあも。みる懇よせえあひて。その日中山と起行し。  
晝夜路とらうき。日あつは都よまうり。夏の形勢を奏せり  
あれハ主上後醍醐天皇御感斜あり。どすから今度の恩賞とらうく  
御取愛の女官了字前とらう。今茲十九歳。あつらあふ。良政卿  
の宿此妻あぞ下されつら。この了字あハ江州坂奉ある縁の家ハ  
児たりらる。幼れ時父母よおられ艱難此中ハ人とあうり。顔  
色頗艶麗なる。あつら小主上觀山行幸の時とら。そそく  
覽ありて大肉小召入らる。危民間より如く。宮闈ハ扈從とら

東鑑言上

四



女房は白河院の祇園女御後鳥羽院に電菊殿と云の字あり  
 の外もなりと也。間住休題良政卿は今勅諭のかりむきと美  
 して當惑面よあうわき。ひそりにあひく。それ月小夜と執柯  
 此同あうく。殊更彼久く村落の中不在といども聊貞探と  
 過こころに。今り別に妻と娶らば盟約ものづらるとなり  
 言と食よいふべし。とせんかくせんと思ひもいふども。恩勅  
 推辞に言ふれぬ。せひあう勅答くく。万字前と三條の館は  
 迎ふふ。祇親戚つとみ来く慶賀と述日々此宴會に持  
 めき。既よ二月あうなり。良政卿は月小夜姫の待らば  
 あう。とむく。後とさうがら。免さう。この後告る。後め  
 くれ。さう。以体めく。あう。一日万字前よむ。ひく。月小夜

姫と作伐あり。と一五十物の。このあう。いふ。あひめ。ふ。と  
 問ふ。万字前。う。驚る。さ。あ。い。らく。このあう。な。と。疾  
 め。あ。え。あ。さ。ら。女子の夫とあ。あ。誰。と。う。め。の。と。殊  
 さ。う。ゆ。う。と。け。髪。も。肩。す。は。く。初。え。の。ひ。の。末。ま。く。結。び。あ。い  
 ぬ。る。人。と。い。く。う。と。あ。や。い。ま。あ。う。と。う。か。嫉。妬。此。あ。後。り。や  
 あ。う。んと。あ。ひ。あ。あ。あ。ま。さ。と。日。免。さ。う。ふ。わ。く。このあう。は。め。う  
 去。う。ゆ。う。縦。ひ。勅。命。を。う。と。固。辞。奉。る。べ。に。い。ふ。う。な。り。と  
 人。乃。恨。あ。う。ん。と。せ。ゆ。う。け。れ。と。世。ふ。た。の。り。ゆ。え。の。か。ま。良。政  
 卿。大。ふ。あ。あ。び。や。か。て。橋。主。計。め。よ。居。多。乃。士。卒。と。さ。う。副。月  
 小。夜。姫。の。迎。と。い。く。小。夜。の。中。山。に。遣。し。ま。彼。地。ま。月。小。夜  
 主。從。良。政。卿。の。起。行。し。め。ひ。日。を。く。怪。鳥。此。軀。と。街。道。の

貞進言石言遺言書卷之二

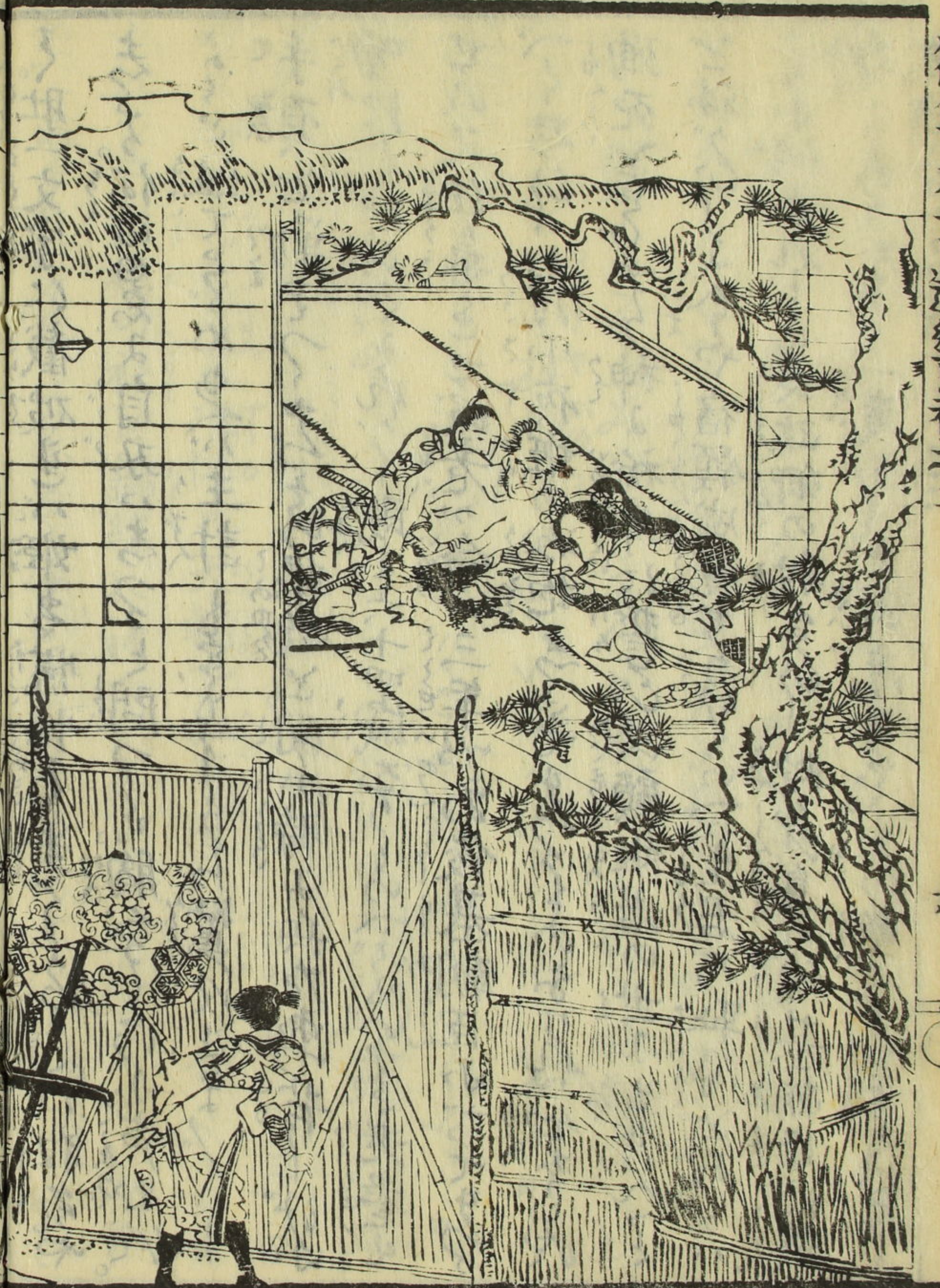
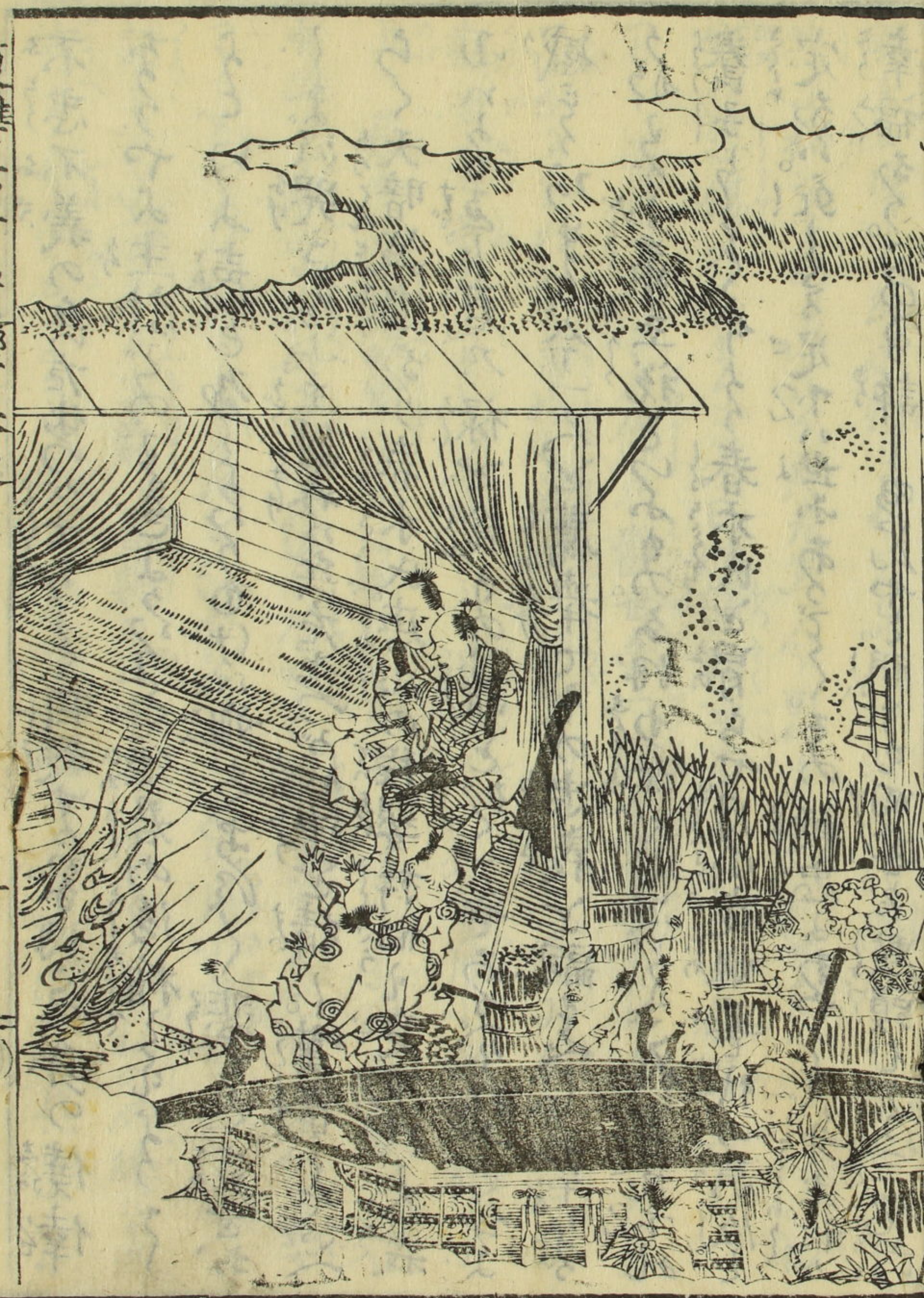
四



備たる天坪沢に埋先上小標れ松と裁く跡懇に吊ひはけり。  
 りつら都の信耗とまらあひしが既よ五七十日の日数経きど  
 も黄犬れ音もかろれは兵たあつ大よあやしく蛇の圍ふれさ  
 駒ち繫ぐとむ二みらひくる人ご後頼せくおとせありけり  
 つぶやくと月小夜姫穿あひていぞうけつて何んさぶめく  
 公吉ふいとちくと迎人の遅ルよこあめりといひく。ひささか  
 恨る色あくおつせしつ人のごとくその翌日主計女多くの士卒  
 とおく槇の原ふあり月小夜姫れ洗迎をると呼門して良政  
 郷の御書と呈上準備乃大轎と扛居せれば姫も今さうあ  
 とにめき。襪褌の袂と錦繡に被く既よま出んとくめ兵た  
 あつあまうれれさふまもやしてありさう。何思ひる山刀にさ

く。肚一文字に截破まば姫も慌忙くまうらる。この狂気や  
 まうら。何の由も自及にあつると問つて胸がくは声出に  
 ふくと泣てさめあは主計もさういらら驚死。さま  
 手負と勅さつちづその縁故と問ふ時よ兵たあつ若げふ  
 吻にくいらく。それぐ既よ六十四歳ありとつては。いさ老老と  
 せの又狂氣もせは老が命の三年以あ俊基朝臣おたてする  
 づくあひが月小夜姫のぬ抱まうそけつてそのおりん。心ちう  
 殉死とさや。神よ祈佛に誓ひ只顧姫君の世小出みんと  
 と縁ぐひよ今や宿願成就せうか。い主君乃耻辱とあう  
 とふ似しれも良政卿の射多の蛇身鳥の俊基朝臣れ後  
 身とあうたさ。一度あうと再度あう。主の撃さうとよそいん











側室の席に居るべし理よ、や侍れと宣ひしと。万字の前ま、  
 忙しく座をたらし。月小夜姫と元の席に押かほし、  
 きよふ乃縁あり。いづり正室の席も、  
 あひまれば良政卿もつとま。正室のつとま、  
 りくはまして見ゆ。然りしう、後月小夜姫あり。  
 むく。時小あれて、父の菩提乃為中山の觀音寺、  
 くらりしとひ出ぬ。良政卿もその孝心と感激、  
 引のひちがう。つとま、後ち。公發よとなく。それ聖年の秋、  
 足利乃確執より。天下穩らう。れば終ふ。  
 光陰よく五七年と経く。月小夜姫の腹小姫君、  
 あひ姉と小石媛、香樹丸と名づり。今茲五、  
 小威

あ良政卿は、只是掌の中、  
 月小夜姫におも、  
 主のボと敬ひあり。万字の前、  
 假言代飾で、おられとま。月小夜姫、  
 て二人を、子と擧げ。おのづ、  
 むも、  
 死ね。  
 月小夜と殺さん。二人の子、  
 碎と。色あり。  
 月小夜姫にむ。女子の寝、  
 戲となり。女子の寝ると伺ひ、  
 近曾酒興、  
 果と塗切。



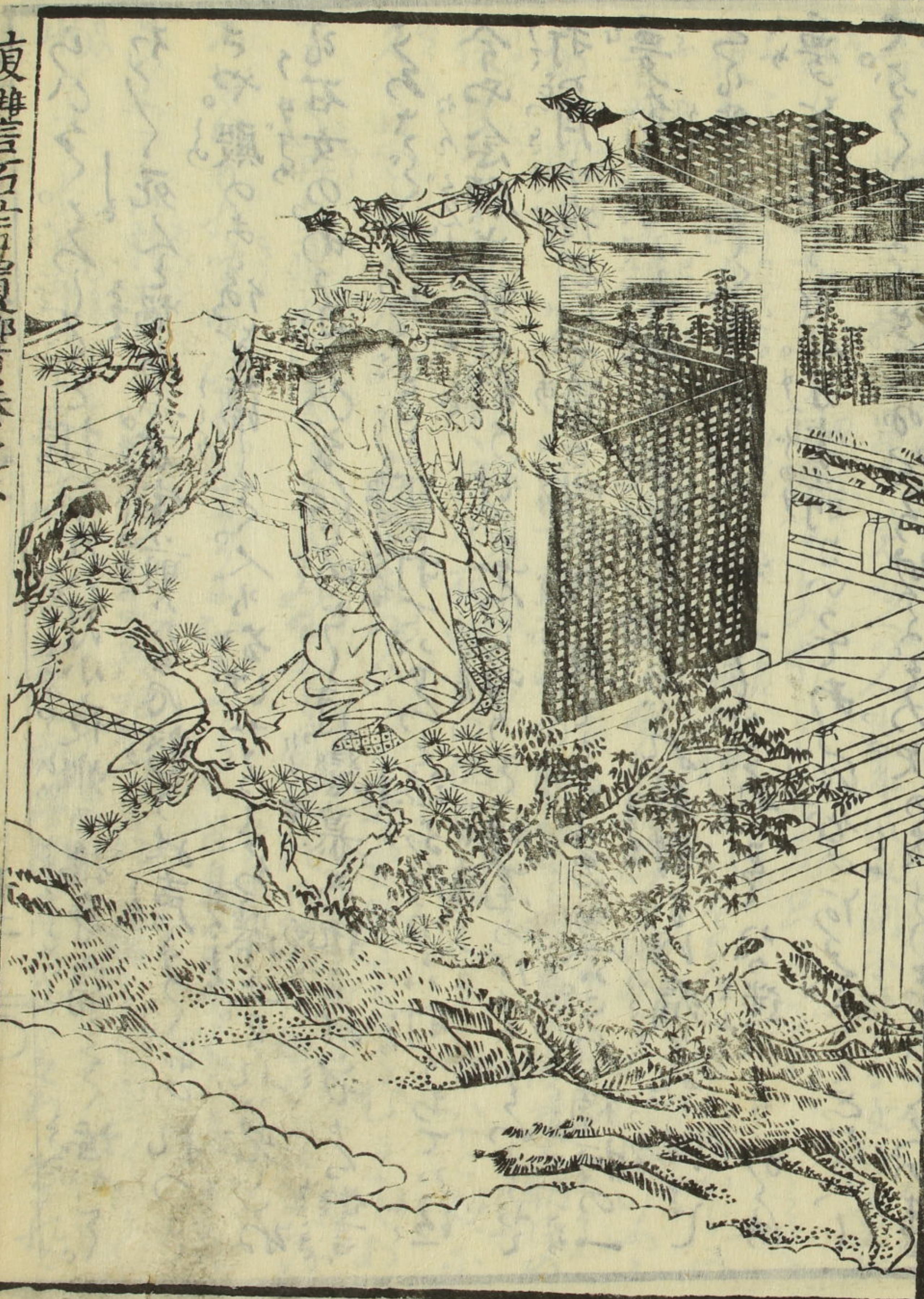
その人志づばして起ると見え。むさ小笑つやあつた。つら  
疇昔まらぐれるあるぬまきど。女の童かゝる告ううしやる。  
と洗ひおしと人小も笑つまうた。その墨ハ膏何れ物と  
摺へば頓おはちぢかきて殿と卧ぬ夜あつた。寝  
あつと生実とらうけり。月小夜姫これとゆて殿ハ日未心  
西くおつたに。いそかく人を耻えく抱びあせとあつと  
おづ。これ小回答うらちさあひ。次の日夜話よ侍り。女乃  
童がいきりふくて假寝せし。何人うまうり。鼻の上と墨あ  
塗られすと。婢ぢられ笑ひゆめけ。月小夜姫はくはあつた偽  
あつとらうらむと疑ひをひつ。良政卿の房よ入る夜ハ袖と  
鼻と覆ひ。その遊戯と避あつた。夫のうまづくなられ。良政

卿は怪とある夜万字あ小あつた。のり依話と彼何の也  
小。これとよ卧ぬ時ハ夜をぐ鼻と覆ふやんと問あつた。  
万字前のり。こあるやとあひ。今問ひあふはばい。あ  
く白地よ告やあつた。日外月小夜姫とらうけり。話うたあひ。あ  
洗つた。小あひまや。近づく殿の口中臭くおつた。ますあ  
臭氣小壇ど。房に入る夜ハあれと避ふ小術あつた。あ  
侍るとのあひと。さうはあひ侍り。とつら。彼人の鼻  
と挿ひあつた。あつた。伝とんと誠しやに告うれ。良政勃然  
と宣ひまら。それ生平小玉座は咫尺たてあつた。口  
あつと。遠くけあふさ。彼何のあつた。櫻よ。まを耻  
と。口言う。憤。鐘愛忽ちあつて。月小夜姫と枕席と











らひく。あしりと打つれば月小夜姫の摠身痛く堪がく。  
 死んと惱め万字前のなほ怒りし声うくおのれつこ  
 さや。殿のあゝ後を蕩しそ。人かおけなからち舉止りれ兒いぬ  
 石女のおふふひるにのどく月戀慕乃仇。此が老雙言  
 こあさびくおおぐさい。丁と打てばと法おれつ。打ちては法  
 今や念願成就の釘うけよつと鳴りそ。鳩尾の所さいつしと  
 打月小夜姫の意と叫び愕然として覺めば。楠柯の一  
 夢あり。月小夜姫の全身汗あぐれ。肢體は痛くは。あま  
 る悲しくく。あゝ伏去つとあつて。これいそ。迷ひるわ依  
 夢をいん。あし万字前といそ。あゝ心は何ぶ。こ。あひい  
 て。ふうく。あしとあぬぶ。うけよ。その次の夜う。せのひて。人の生

音を怪しと杖と舉ぐ。えあへ。人も本に。奴副小外。女。の。重  
 起して。えせあ。よ。目遮る。よ。あ。とい。是。只。み。小。あ。ど。く。  
 夜毎。小。護。身。刀。に。袋。と。脱。し。襖。の。裡。に。引。き。え。と。潜。用。ひ。し。又  
 普門品と讀誦して。あ。妖。と。攘。ひ。ぬ。あ。ぬ。あ。ぬ。あ。ぬ。あ。ぬ。誰。い。と  
 かく。風。声。し。る。い。ぬ。羊。良。政。卿。の。射。ぬ。怪。鳥。俊。基。朝。臣。の  
 後。身。を。う。あ。と。り。く。月。小。夜。姫。父。の。仇。を。報。ん。と。ゆ。い。と。既。小  
 久。と。い。い。ん。力。及。び。し。止。止。志。ぬ。ひ。し。近。曾。殿。を。う。む。む。と。あ  
 了。く。再。ひ。悪。念。と。さ。さ。さ。み。み。あ。風。花。に。月。小。夜。姫。の。れ。と。あ  
 り。ぬ。に。れ。つ。あ。ひ。く。む。そ。う。よ。あ。り。く。怪。鳥。は。う。く。父。の。後。身。を  
 こ。い。わ。く。た。敢。ま。る。よ。の。あ。り。し。兵。左。衛。尉。が。死。し。臨。し。と。田。づ。た。く  
 物。が。う。く。と。迎。の。士。卒。が。鳴。り。あ。り。て。形。風。聞。き。る。小。と。あ。ぬ。あ。ぬ。



その比ハハハもせだ。五六年に月日と経く。今故おたよかろ凡説  
 あるふりさよ。げんばちたせがうり此殿もかくとゆふあつた父の  
 耻もつた辱もく罪障ふたに父子の刃も果たす。この  
 うハこの刃の暇と得く。佛乃道も入べに。浮世は觀じぬ  
 ぬれと良政卿を仇とく。うううう。あまの流言ハさうよまむむ  
 かりかり。かくて良政卿の風声と傳へつる。大小あやしそ  
 のひはくく。あひめく。せち。これ曩は怪鳥が射う。これ  
 月小夜主従不覺の落涙もあひりあつ。その時ハ心つく。こ  
 ろか。何さまや。此縁故ある。これ彼怪鳥も俊基の後身小  
 しく。月小夜もれと怨るといふ説據も此にあつ。はく。これ  
 彼が形勢を窺ひ入る。へと思量あり。その夜月小夜姫の臥房  
 又入く。世事語り。心とつけく。座右と見さす。横の端より刀を

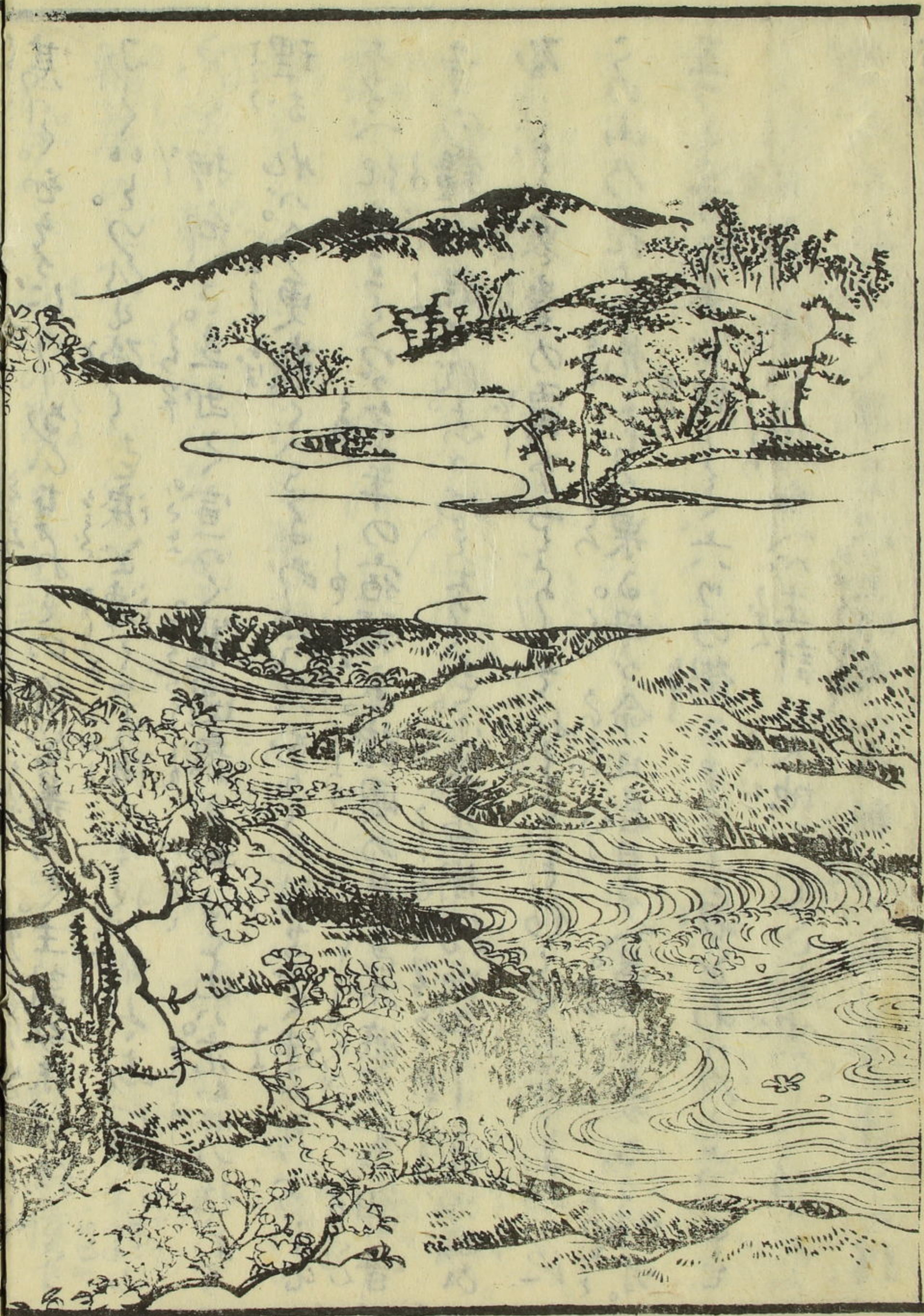
鞘がく。えり。さうて。この女害心と挟むと疑あり。猜しぬ。ぬき。  
 怒と匿く。潜小は短刀に懐ひ。ぶせて立おとす。夜のぬるとまら  
 ころ。長臣橋主計存と口く。まぐれりと語りぬ。汝月小夜を  
 洛外に誰引出。人志れき撃て棄べ。命もあ。ま計女大い  
 驚に月小夜姫も子く。か係邪念のあ。謂あり。これ今も誦  
 ふ。死妾誼あり。く。賢慮とめく。あ。を。言。と。智  
 く。諫やせ。良政勃然。怒氣面小あ。これ。彼短刀と示して  
 宣へ。月小夜これと撃ん。先。卧房小劍をひく。置ぬ。うへら。  
 更既。明白な。む。や。你。終。忠。と。竭。人。と。する。又。月小夜。志。と  
 せん。とする。これ。ま。此。主。計。存。主。命。固。辞。道。あり。く。や。



領堂しく退つづると良政まをくとよびとめく宣つゝ。今汝は  
 この短刀を預るなり。あれをのこす彼女の首と斬へくと命じ  
 りハ主計女唯々うとくこれと受けり。やして月小夜姫のままま  
 出くつゝ。昨今志賀の花さうりよは彼地小流供侍りゆと  
 この福乃鬱氣を散らちと殿の仰小ハ準備侍りゆと  
 かく出せめと促り。月小夜姫ハ風小むり夕櫻晝橋朝貞の  
 つの命と志つるに。ころふそはぬ掛山をれと殿の作と  
 辞とへさおあつととく。なぐて出せめひらうかくて主計ハ白川の  
 山ふり轎子を扛とえさせあうり従率ハふる館よかへ。印で  
 轎簾のまへまらうとをめぐりアけら。今日ハ地ハ誘ひなり  
 し。つゝ掛山の為をて誠ハあつくれるまらうと殿の法憤ア  
 甚く。おろにうらひなれとの仰と兼り。主計女未供侍りゆと  
 みるいとつひと涙と連くや泣くはれ。姫ハあつやに轎の  
 戸を押ゆき。ま出く宣つゝ寵遇衆ハ挺りよの元龍の悔あ  
 理おれハ今更歎くべまあは。只ありん跡まぐ迷ひ乃つゝ  
 ちるべにち。ころつゝが多年の宿願を。諸國の乱ま不遠くも観音  
 寺の鐘成就せぬ。あつちをむ。小石香樹。切地ハ入るまあひ  
 取らうハ恩愛の羈をまらう。それとて何とて罪業かうた  
 るの山乃花より先まちる果る母が命日忌日と夢の爰ある婦才  
 五つと三つの子を残し。六つの街まらうふあを。あつれとて  
 うらふ首さう伸く待ぬ。ハ主計ハ大地小とてとせし。つゝ  
 若命おれとく。罪をにまの夫人ハ斬人とあれ。不運ま。殊

復讐言言遺集首卷之二







さう春木兵太夫の盟約せしむれば。小才主説と先づちて  
彼人の假子と定免香樹君の小鳥従ふなり。おたがうおれひ  
さや。忠とさうれが義もそむた。又義を守れば忠なり。首鼠  
両端は迷ふといけ小侍の刃れ上げど。つれあたよあつてさや  
世どうも。意氣揚々さう丈夫も。惘然とさうあつてさや。姫は後  
をかつてえつ。よりさや主計お君命の親をも軽き。平治のむ  
おりのさや。さうくと宣へば主計ややくまあつて。彼短刀を抜出  
さう揚ぬれと腕麻さき雪さうに頸元よ。更小當べさ双もたう  
る月躊躇さうええさき。月小夜儼然とさう宣く。さよ主計。何  
とさうかくの後ぬる。さよおた心さあつて。飽さうと勵さあつて。お  
五計今いせん。さうとさう。さよさう。六字宝号唱も。吃らば。

南無とさうりと相圖ひく。流首おさおちりれば。そのはゆり刀を  
投さうと。且く物もさあつて。姫はさうさう省く。さうと時さう  
しぬ。主計くと呼ぬ。主計はめくつと。さうとえれば。今撃  
たり。月小夜姫は恙なく。端然とさう坐さあつて。おさういりおと  
あや。さうとさう。敷皮の邊とさうさう。小引接の為さうと。いぬる年  
月小夜姫。良改卿より得ぬひ。金像の觀世音と。膚の守袋  
さうとさう。敷皮れ上よ。さうとさう。置さあつて。不思議さあつて。お尊  
像。流首さうとさう。おさうとさう。おさうとさう。おさうとさう。おさうとさう。  
尊。さうとさう。と感涙雨のさうとさう。さうとさう。さうとさう。さうとさう。さうとさう。  
空さうとさう。後さうとさう。乃久圓寺小安置さる。お代のさ像さ  
さうとさう。さうとさう。おさうとさう。おさうとさう。おさうとさう。おさうとさう。



彼尊像と伏しわがこころつく。世お十悪の人ああ被也。  
 菩薩の御首を撃ちたる無道人のあつた久一旦主君と欺  
 のおそれあつても只主計ぬが一命よりえと助をせめと侍て  
 この奇瑞と演説し。流夫婦の再會と謀らる。且くあのみく  
 かりませと姫乃を推ろと引まはらつ地あり匿し置まの  
 すとこと躊躇せし。近屬後醍醐天皇の御建立あり元應  
 寺ハ。山城名跡ニ元應寺ノ旧地ハ法勝寺ノ北ニアリ此寺應仁ノ兵火ニ亡ビタリ云々幸ひちうにそりあて開山の  
 住持傳信和尚つりて師壇の周にあきば。姫と彼處に侍ひゆに  
 傳信和尚小縁故と語りそふく舎藏のつべと頼おれぬ短  
 刀とめりてつづし股を辟破りて柄のわづらむと血を注だつち  
 又館小支うつ流が良政卿あて流前より召め主計ぬちりすそ

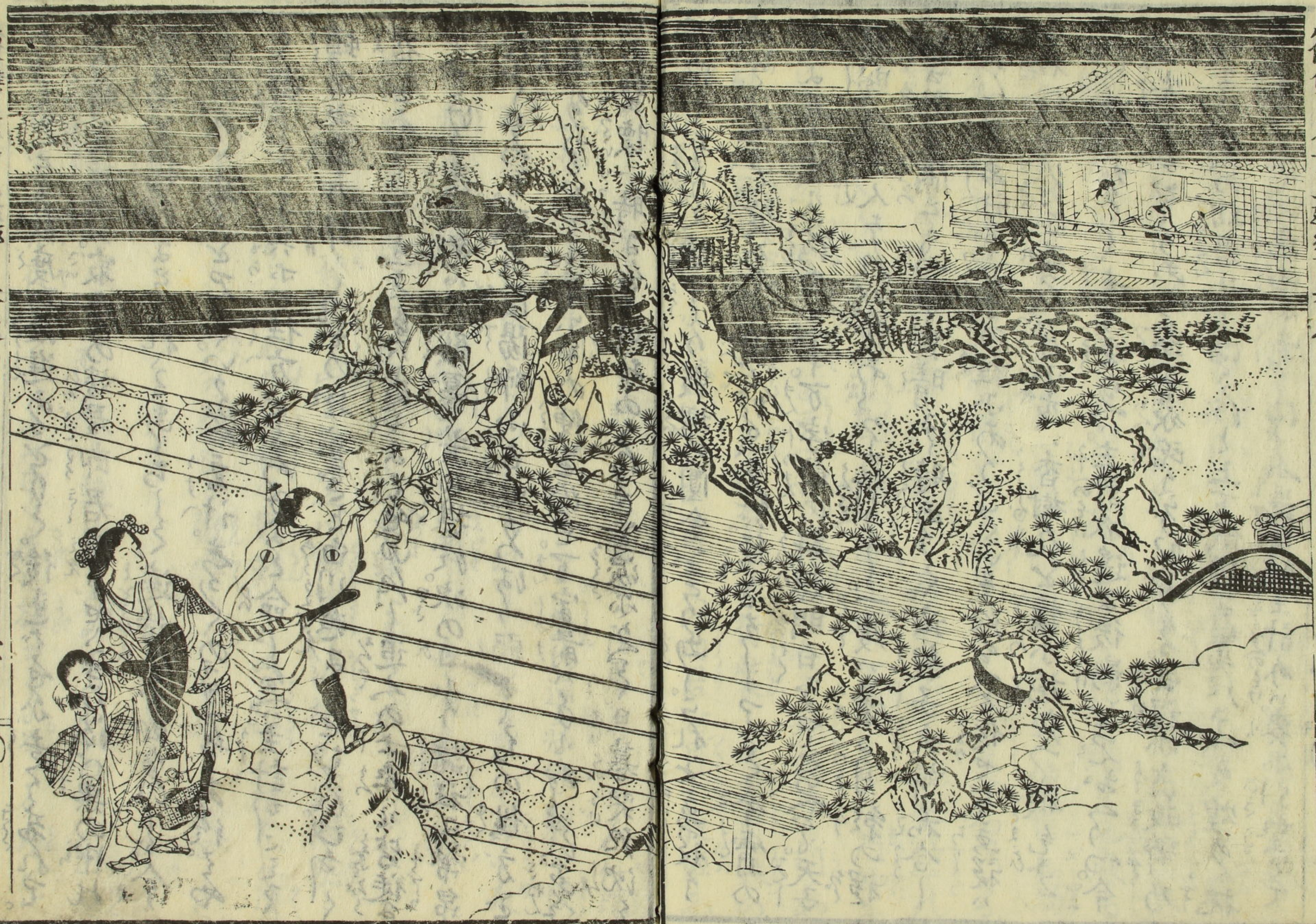
ちりて君命黙止がく潜る月小夜姫の流首とちりて  
 まのりぬといひく短刀を座邊小うかたて只帯を落涙よ及び  
 りれば良政卿もさか後聞と憚りぬくも尋ねぬる首実檢  
 ちりて万字前のみの光系と見ゆと計成就せぬ  
 ちりてびがふやわらびやるらん月小夜の生ぬひ小石媛香樹丸  
 とむ。この序小毒殺せむやと心定めぬら計をめぐら  
 ちりてと主計ぬやく知見そ大い増えたり小計ありる喜  
 ちりて後小さやうるは流刃既よ十五歳やれ一個の丈夫あり  
 ちりて士の道とむにたす知りたるべし。今あつたの禍ありて小石香樹  
 の兩君危難旦夕小迫れり。これ如此く計あて流刃供してつ國  
 乃深山より立ちあのびちりて介抱しませぬ。ちりてとらぬ共



らぬ地とまきし。その疑ひりれよのりて却る稚児らの禍と  
 ちるべられまづけ身をば病死す。体よめそ。あつしく後  
 事とそるまづ。音あせそとのひく。俄頃、横引被せ。八只  
 今頓死あつと披露しく。その夜、主税と棺、納し元應ち  
 小あつらる。の寺あもつ移く計と牒合にたれば傳信和尚  
 又主税ととかく。ぬに空擲むる埋むるとまる人更あつらる。  
 主計ぬこの日より牙の喪より引替くありらる。あつ夕暮館れ  
 裡小あのがび入つて兄才の幼君と竊出。堀と跳こえと門外に  
 わつら直お加茂川堤と良へまう移る。相國の時刻とあ  
 定むにらん月小夜姫ハ春木主税とらん行装しく吉田の森の  
 木陰よあのがびありらる。主計をわつら二人の幼君と月小夜姫ふ

遍興しをり。又懐中より數塊の圓金をとり出。これと主税と  
 あつとく。定むと追人がたれば徑をま。了と今宵の  
 中よ五七里もあつ。べ。百字前の軒悪明白なるといども天子  
 恩賜乃夫人をれば。今あつらよ訃ごと。一度ハ曇る月影の裡  
 ハ雲井は隔るも。つひ小晴る時あり。遠親子夫婦相合し  
 ありらる。主計が方寸の裡小あつ。こいそたあへと使せ。主税ハ  
 小石媛と脊小あつ。月小夜ハ香樹丸と懐小抱たつ。暇乞さ  
 いひひく。なつとまう去の。主計ぬ遙は後影と見おつ。今  
 心安しとむらあち。遂は家路よがかつらる。去程小良政郷乃  
 館ハ二人の幼君とあつ。上下俄頃ハ驚馬にさ。燧めく挑  
 灯星の。人東西小まう。長臣橋主計ぬ。喪小引替て











いそだぬこの山と父俊基朝臣の終焉れ地なり。そらか為  
 縁の里なれば。あつぬ國小佐んより。これ處おこそ止まへられと。  
 どの定めくまそあつた夜の山中に宿しあひなれば。まねの  
 詰朝處くと走りけり。菊河より逢西上庄の窪といふ里あり  
 づ。あつた一軒の空屋ありと。贖得つ。主従四人僅小膝を容  
 まく。うた年月とさく。あつた。只二人の稚児と。この成長とこ  
 う後。このま。惜りぬ世に捨るあり。あつた。こをとりて。あつた。  
 かに賤婦山見も共小袂と。あつた。あつた。

續像復讐石言遺響卷之二畢



